

栃の木からの手紙

2021年 卯月 4月号



3月20日、自然農法の全道研修会が Zoom で行われました。コロナ禍の恩恵とでもいえるのでしょうか、自宅に居ながら札幌へ行ったり、東京へ行ったり。

4日： 清明

12日： 新月 :旧 3月 1日

20日： 穀雨

27日： 満月 :旧 3月16日

今回の研修会で認識を新たにすることは、慣行農法と自然農法の畑では土壌中の微生物が違う。また、後作緑肥としてのエン麦を栽培して春先に畑にすき込む事で土中に植物の根を残しその跡が土中に酸素や養分、水分等を供給する通路になるという事。

3月末には、雪の無くなった自然の畑。昨年黒大豆を栽培した跡には沢山の大豆が落ちていてそこに糸状菌が繁殖して雪が融けても白く見えている部分が確認できました。今年から、黒大豆の作付けを辞めますが、後作緑肥としてエン麦をヒマワリやキカラシ、芋収穫後の後作として取り入れる予定です。



自然災害が多くなったと思っていいたら、造られた新型コロナウイルス禍が始まって2回目の春。自分たち自ら首を絞めている様な様相。3密を取り入れて行動抑制をする事で感染者数を押さえ込み、愈々ワクチンが登場した所で、事態急変。従来の新型コロナウイルスが変異型に急速に入れ代わって来ています。これが普通の自然界の行為。人もウイルスもそれぞれの個体にとって最良の方向に変わって行くもの。この件から考えさせられる同様の事象が「遺伝子組み換え」に起きています。

1990年代に導入された遺伝子組み換え作物。作物に散布しても雑草だけが枯れて作物は枯れない物だったが、10から20年も経過すると農薬を散布しても枯れない雑草が多くなってきて遺伝子組み換え作物の価値がなくなって来た。そこで、従来の強い除草剤の耐性を取り入れた遺伝子組み換え作物が開発されそれらは薬剤として強力な剤となり自然や私たちにとって負荷の大きなものになっている。 コロナウイルス問題でもワクチンのいたちごっこが始まり、結局は一部の人が潤って行くという経済に基づいた在り方から本質を求める在り方が大切なのかな？

遺伝子組み換え・ゲノム編集関係の資料を添付します。

4月1日、有機JAS用の赤ビーツの種まきを行いました。 資材の有機認証の取れている有機育苗培土「ゆうきくん」を使用して128穴セルトレーで36枚播種しました。